②旧・火薬製造所エリア

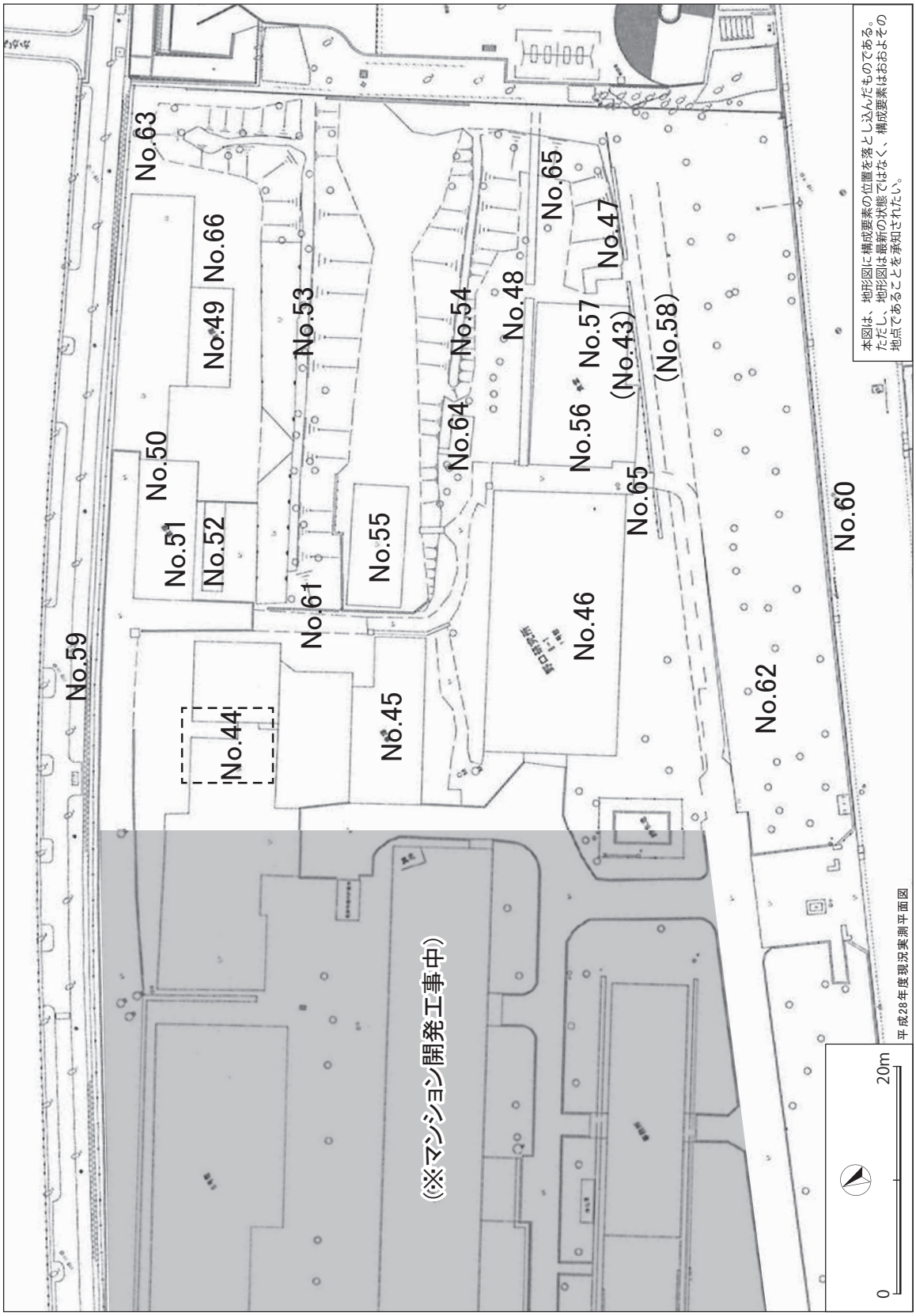


図 14：構成要素の位置図

No.43　土塁

概要	・軽便鉄道軌道沿いに、築山から西方向へ構築されていた。 ・詳細な設置時期は不明だが、史料上は少なくとも大正 10 年にはその存在が確認でき、昭和 22 年から同 44 年の間に除却されたと考えられる。
履歴	・大正 10 年作成図に関東大震災の被害状況を書き込んだ「関東地方震災関係業務詳報附表及附図」（文庫－柚－375）によれば、築山から現在の加賀橋につながる区道付近まで土塁が構築されている。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、土塁と思われる表記があるが、長さは短くなり、築山から試験室（№.522）付近まで構築されている。 ・昭和 46 年に撮影された写真によれば、叙上の位置に土塁の存在は確認できないため、昭和 22 年から同 46 年の間に除却されたものと考えられる。 ・昭和 60 年以前の「計画平面図」に記載あり。
写真	

No.44　爆薬製造実験室

概要	・現在は旧・火薬製造所エリア北部に位置している。 ・構造は鉄筋コンクリート造の平屋建築、屋根は切妻屋根。トタンによって外壁が後補される。 ・建築年代は昭和 10 年 1 月。 ・戦前は爆薬製造実験室、野口研究所時代は 5 号館と称されていた。 ・野口研究所時代は、各室を西側から 501 号室～ 505 号室と呼んでいた。 ・平成 29 年に曳家工事を実施し、建物西側に位置していた爆薬製造升部分を現在の位置に移動した。 ・内部は 2 層階と 3 層階の鉄骨の足場組が設置されており、設置年代は不明だが、「東洋高圧機口株式会社製造　昭和 32 年」と表示のあるプレートが付属している。 ・爆薬製造実験室と加温貯蔵室（№.457・現存しない）との間には防爆壁が設置されていたが、平成 18 年以降に除去されている。 ・現在、屋根に穴が開いており、雨水により足場組等に腐食が見られるなど、保存環境は好ましくない。
履歴	・昭和 10 年 1 月に建築されたと考えられる。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によると、鉄筋コンクリート平屋建の 310 号は「化学研究室」として使用予定とされている。 ・平成 29 年以前は史跡指定地外に位置していたが、平成 29 年に主要施設である爆薬製造升部分（全体のおよそ 1/3、501 号室部分）の曳家工事を実施し、180 度回転して現在の位置に移設された。

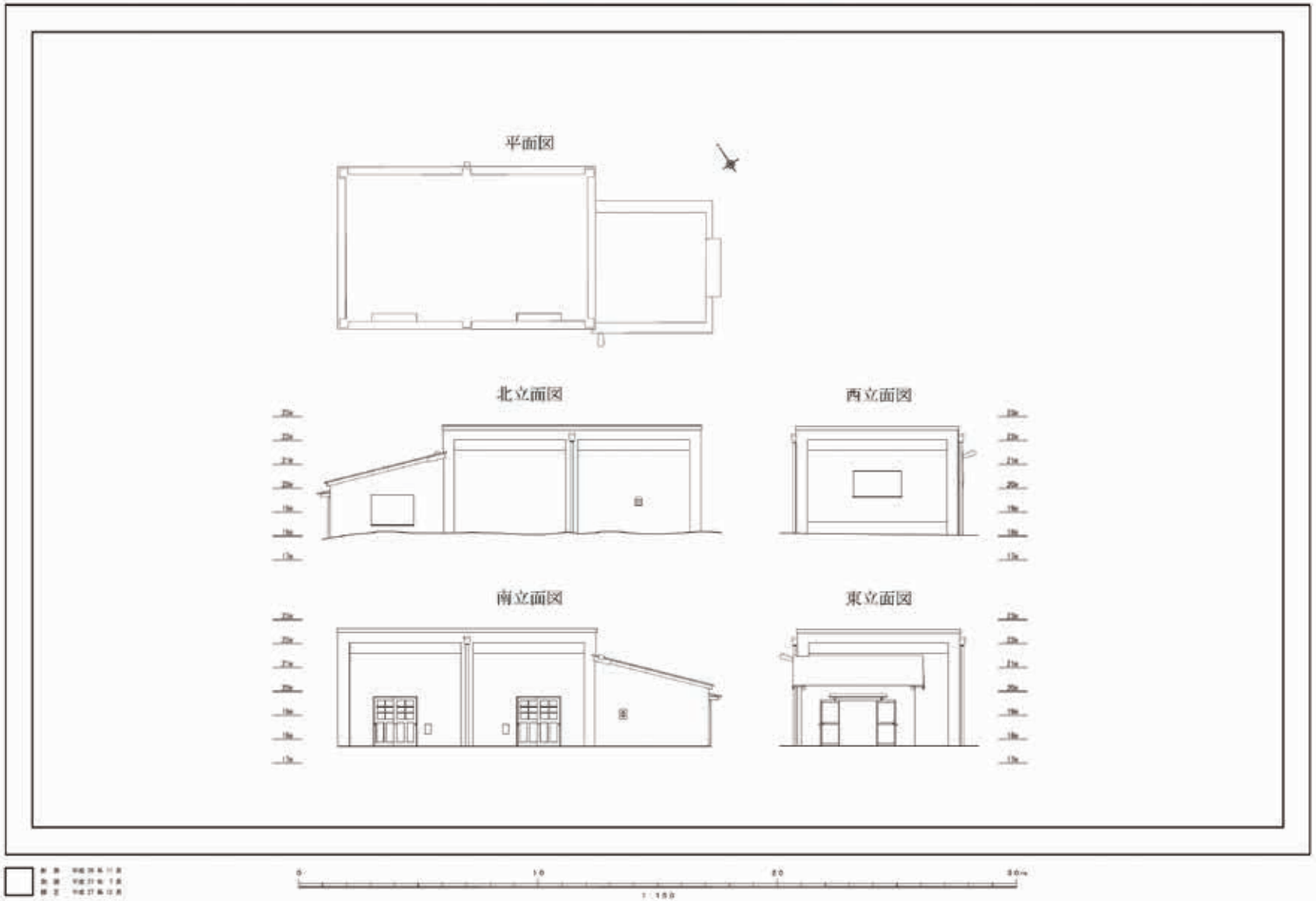
写真	 平成 18 年 10 月撮影 平成 18 年 10 月撮影 ・平成 18 年 10 月に撮影した写真では、現在はすでに除却された東側の部分が残っている。また平成 30 年 5 月に撮影した写真に比すると、現存する西側壁面のトタンに関しては錆が進んでいることがわかる。

No.45　銃器庫

概要	・構造は鉄筋コンクリート造平屋建、内部は木造二階建の棚床が設置されている。 ・木造の棚床は戦前から設置されていたとする証言がある。 ・建物東側には戦後の後補と考えられるトタン小屋が付属していたが、現在は除去されている。 ・建物西側・東側の窓部分に 1 台ずつ、南側の出入口 2 ヶ所に 1 台ずつシャッターが設置されているが、東側の窓部分はシャッターが除去されている。 ・建物南側の出入口 2 ヶ所には引き戸となっている。 ・現在、内部には木製棚や戸棚等が残置しており、表面採取や試掘調査で得られた遺物等を一時的に保管している。 ・以下の状況から、保存状態は概して好ましい状態ではない。外壁にはコンクリートの亀裂が視認でき、かぶり部分の鉄筋が露出している。内部の建物東側の窓部分はベニヤ板で塞がれているが、隙間ができており、内部へ風雨が吹き込んでいる。また木造の棚床は軋みもみられる。
履歴	・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、史料上、銃器庫の存在が確認できる初出例であるが、この時点では木造の建物で、長方形状である。 ・昭和 18 年「東京第二陸軍造兵廠本部及板橋製造所構内図」（加賀五四自治会（肥田一穂氏寄贈）文書）によれば、木造平屋建であり、東側に張出部分が確認できる。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によると、鉄筋コンクリート平屋建の 329 号は「倉庫」として使用予定とされている。形状は東側に張出部分が確認できる。鉄筋コンクリート造平屋建として記入されているのは、この史料が初出であり、昭和 18 年から昭和 22 年の間に改築されたものと考えられる。 ・昭和 46 年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、東側に張出部分が確認できる。 ・東側張出部分については、写真では平成 28 年夏ごろまで存在が確認できるが、平成 29 年には既に除去されているため、その間に除去されたものと考えられる。

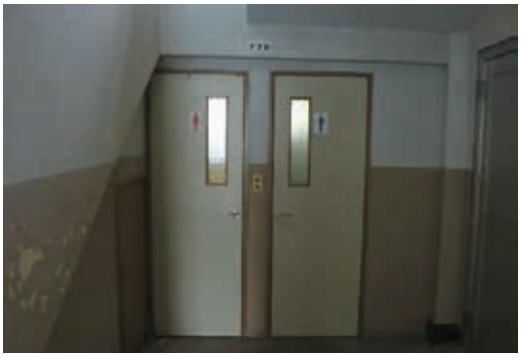
写真	 平成 28 年 7 月撮影 ・平成 28 年 7 月に撮影した写真では、銃器庫東側面にプレハブ建物が設置され、自転車置場として利用されている様子が確認できる。平成 30 年 5 月に撮影した写真では、この部分が除却されており、接続部分に塗装が施されずシャッター跡が剥き出しになっている状態がわかる。

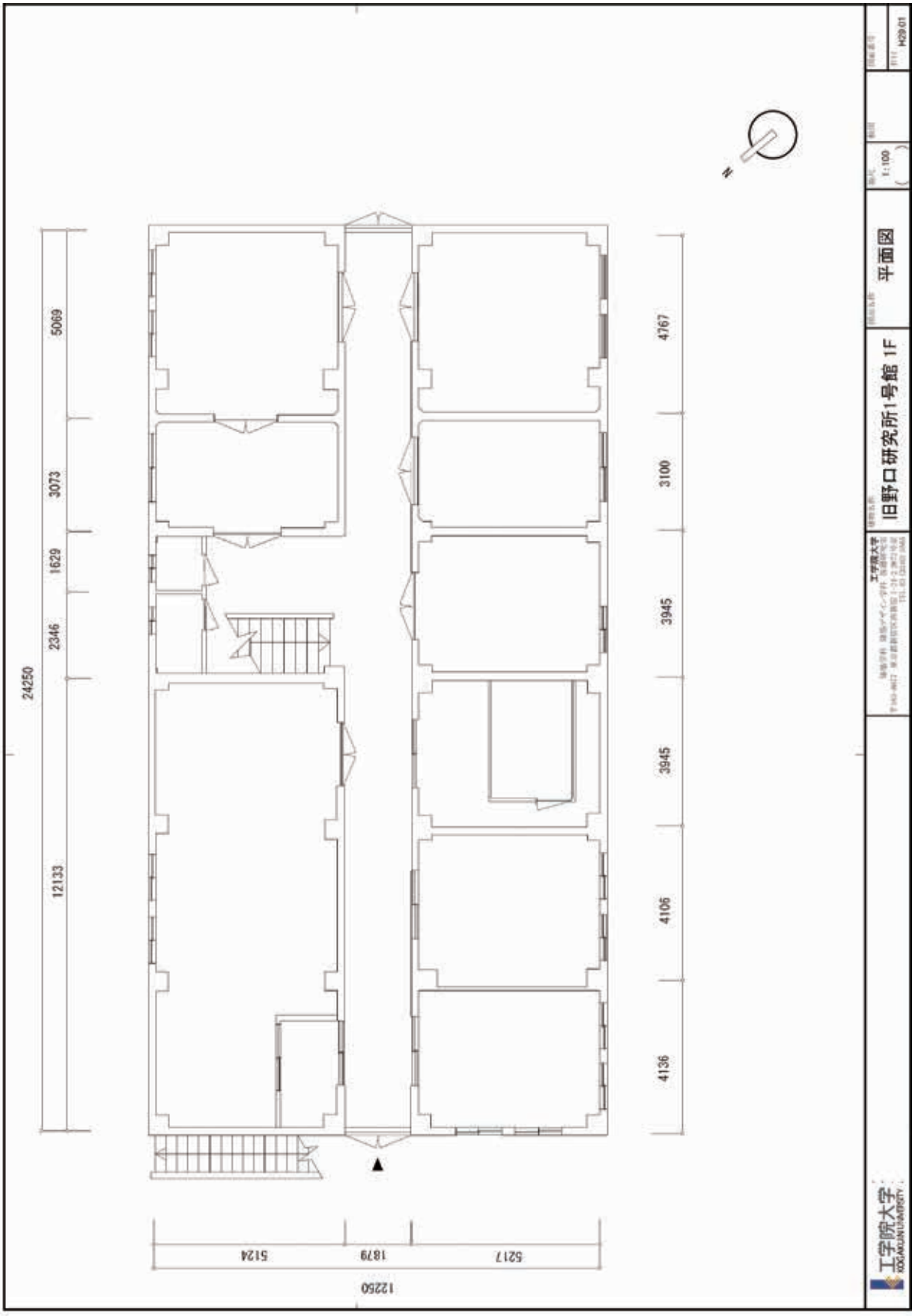
旧東京第二陸軍造兵廠内銃器庫

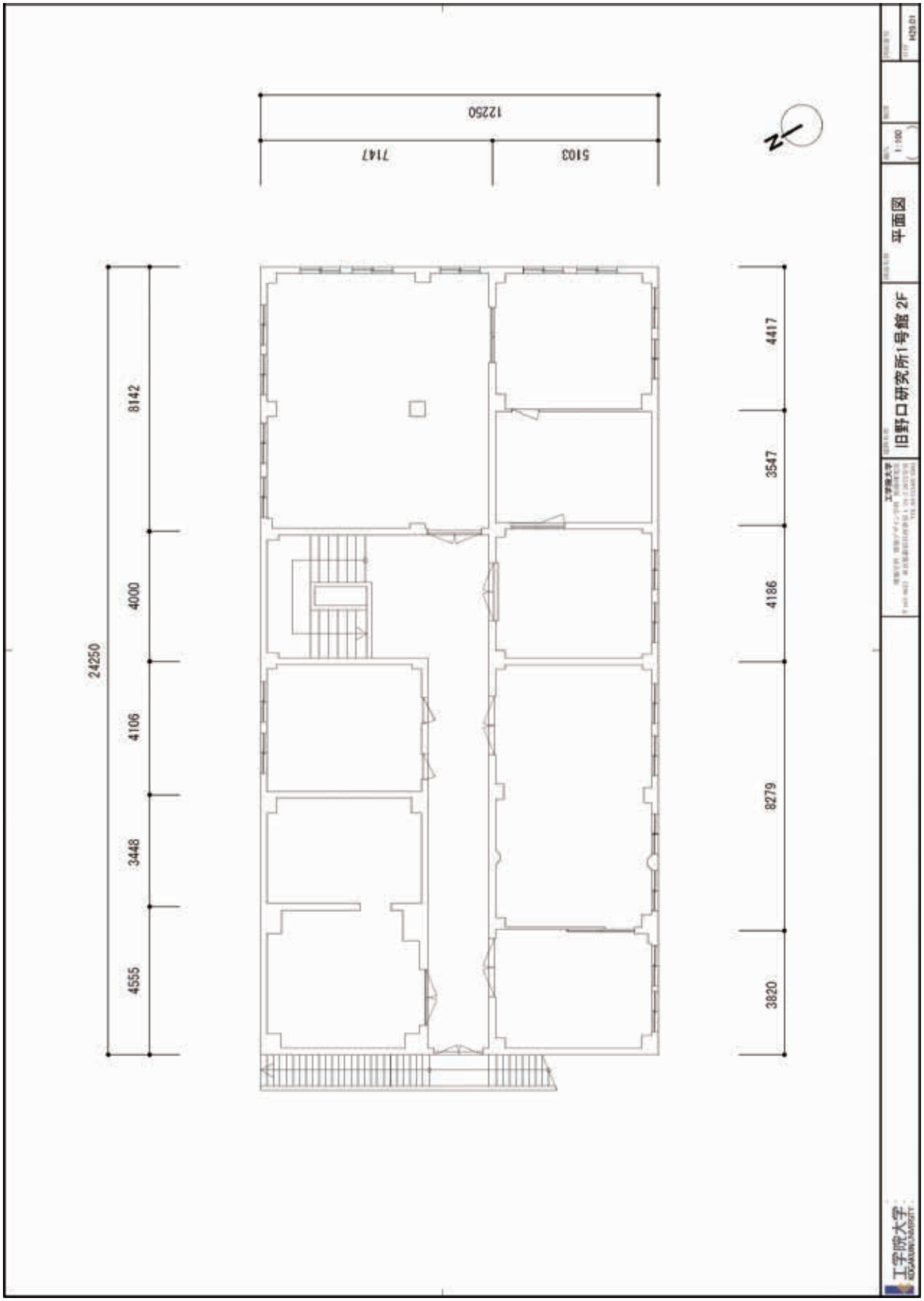


No. 46　燃焼実験室

概要	・財務省№は、№ 622 だが、戦中は№ 290(発射場) である。 ・構造は鉄筋コンクリート造 2 階建。 ・外観の意匠は、装飾を排除したモダニズム建築の流れに位置づけられるが、装飾の必要がなかったとも考えられる。 ・建物の建築年は不明だが、昭和 18 年以降と考えられる。 ・一階、二階ともに東西に中廊下が走り、南北に部屋が配置されている。2 階東端の 128 室も中廊下だった可能性がある。 ・建物内部に設置されている各部屋は、野口研究所時代に研究室として利用されていた状況を残しており、後補と考えられる壁や実験機器に関係すると思われる配管等が残っている。 ・残存する室名札によれば、各部屋の室名は、以下の通り。一階は「細胞培養室」、「112 組み換え DNA 実験室・生体材料実験室」、「113 低温実験室」、「114 生化学実験室」「115 試料保管室」、「P2 実験室」、「117 分光分析室」、トイレ、物置、「118 共通機器室」、「119P1 実験室」、二階は「121 研究管理室・常務理事室」、「122 図書室」、「123 糖タンパク室」、「124」(室名不明)、「125」(旧記念室) か、「127 書庫」、「128」(室名不明) となっている。 ・昭和 46 年 8 月ごろに撮影された写真によれば、この時点では屋上北東部分に煙突が付属し、外壁は塗装されていなかった可能性がある。 ・一階東端の「119P1 実験室」の外壁部分には、27 ㎝四方の窓の痕跡が残っており、弾道管と連結していたと推測できる。 ・外壁部分に残っている 2 ヶ所の庇から、当初の出入口の存在を想定することができる。特に北側壁面に残る庇に当たる部分は、内部にはトイレに設置されているが、当初は出入口があったものと考えられる。 ・平成 29 年度、耐震診断調査を実施し、耐震補強の必要はないとの結果を得た。
履歴	・昭和 18 年「東京第二陸軍造兵廠本部及板橋製造所構内図」(加賀五四自治会 (肥田一穂氏寄贈) 文書) によれば、現在の位置には発射場 (№. 290) の記載がある。これは露天式発射場 (№. 290) と同じであり、一時期同機能で扱われていたと考えられる。また、現在の鉄筋コンクリート建造物となった時点で、№ 290 から№ 622 へ変更になった可能性もある。 ・現在の鉄筋コンクリート建造物が史料上確認できるのは、昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」(東京都公文書館所蔵) であり、「Reinforced concrete bldg」(鉄筋コンクリート建造物)、「2 storied bldg」(二階建建造物) と記載されており、野口研究所は「化学研究室」として使用予定であると申請している。

写真	・昭和 46 年 8 月頃に撮影した写真をみると、外壁は現在のような塗装処理を施していないように見られる。また北東部分の屋上には、煙突と思われる設備も設置されている。 昭和 46 年 8 月頃撮影 


24250
5069
3073
1629
2346
12133
4767
3100
3945
3945
4106
4136
12250
5217
1879
5124
N
工学院大学
KOGAKUIN UNIVERSITY
旧野口研究所1号館 1F
平面図
1:100
H29.01


12250
7147
5103
24250
8142
4000
4106
3448
4555
4417
3547
4186
8279
3820
平面図
旧野口研究所1号館 2F
工学院大学

No.47　擁壁

概要	・鉱滓煉瓦壁とコンクリート壁が接合している。 ・構造は屋根、壁、土台部分からなる。 ・軽便鉄道の軌道と北側の試験室や弾道管等の試験施設との間を隔てる機能だったものと考えられる。 ・鉱滓煉瓦壁が 4 スパン、コンクリート壁が 1 スパン、合計 5 スパンが現存する。また土台部分のみが、西方向の燃焼実験室沿いまで残る。 ・現存する西方向の土台から、燃焼実験室沿いまで擁壁が残っていたものと推測できるが、昭和 46 年の段階では、既に現存する部分で切断されていることがわかる。この切断部分には階段が掛けられていたことから、階段の設置と同時期に擁壁が設置されたものと考えられる。 ・壁面は、鉱滓煉瓦の目地部分や、コンクリート壁との取り次ぎ部分に亀裂がみられる。土台部のみ現存する部分は、鉱滓煉瓦の崩れが顕著である。また植物の植生も確認できる。保存状態は極めて悪い。
履歴	・昭和 18 年「東京第二陸軍造兵廠本部及板橋製造所構内図」（加賀五四自治会（肥田一穂氏寄贈）文書）によれば、現在の位置に擁壁の存在は確認できず、土塁が表記されている。 ・昭和 46 年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、現在の位置に擁壁と思われる構築物が表記されている。 ・昭和 46 年 8 月頃撮影された写真では、少なくともコンクリート壁が 7 スパン存在していたことがわかり、公園敷地内に当たる部分が除去されたものと考えられる。
写真	 昭和 46 年 8 月頃撮影

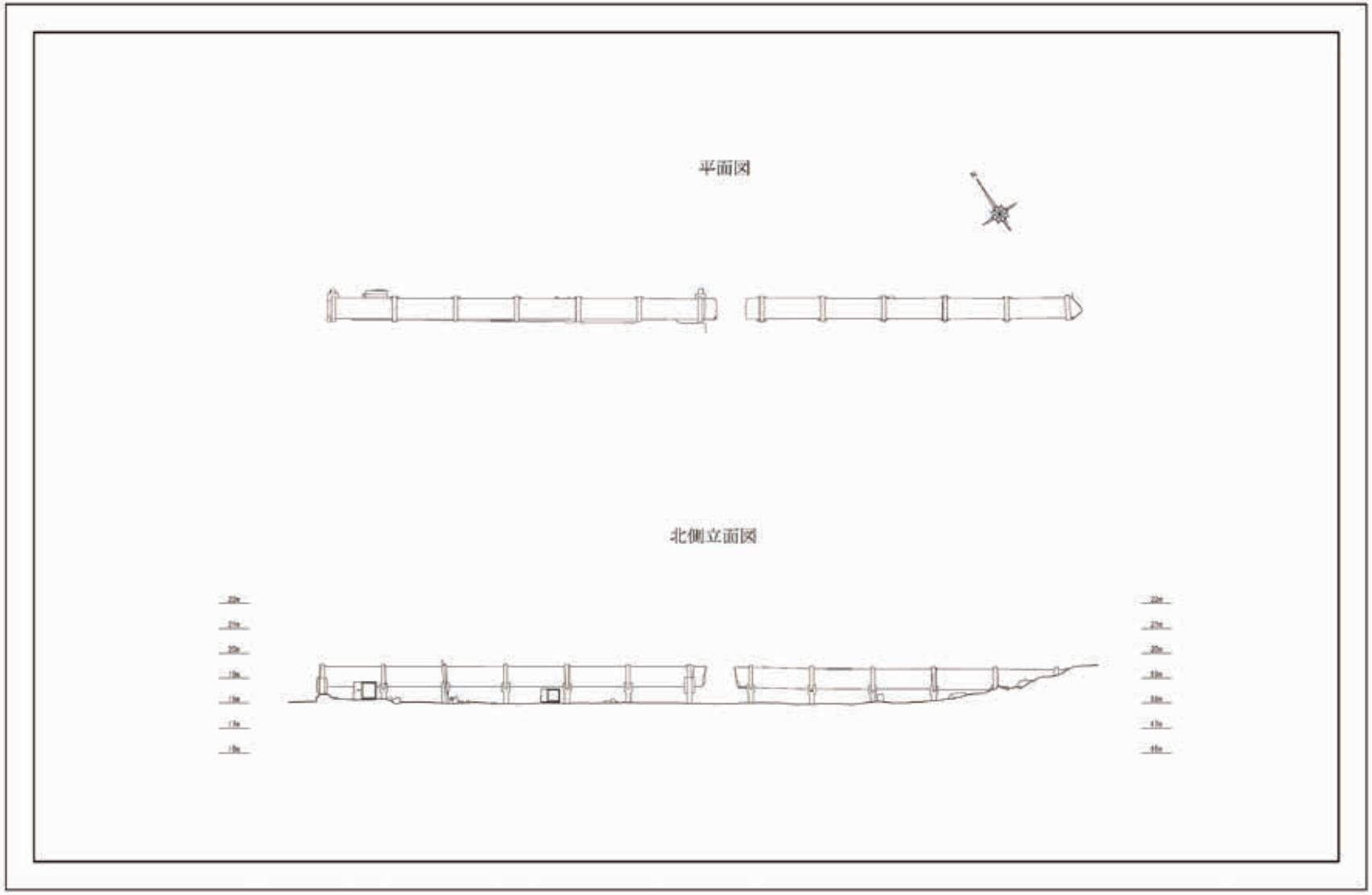
写真	 平成 18 年 10 月撮影

No. 48　弾道管

概要	・現在は燃焼実験室の北東部分から加賀公園の方向まで、30.5m の長さで現存している。 ・構造は、管とそれを支える台形および角型橋脚（12 ヶ所）からなる。 ・管はコンクリートヒューム管であり、内部に「ACRK　27 吋　722」の銘を持つ既製品と考えられる。管は端部分のみ 2 層構となっており、外側は鉄線をセメント塗り固めた構造を持つ。 ・橋脚は、煉瓦組みの上にコンクリートを塗り固める構造になる。 ・橋脚には側部に電線用碍子が上下に 2 つ設置している。 ・管と橋脚は鉄製バンドをボルトで固定している。 ・詳しい設置年代は不明だが、史料上の初出は昭和 18 年である。 ・戦前においては、西端は燃焼実験室北東隅の部屋に連結し、東端はコンクリート構造物の射垛（しゃだ）に連結していたものと考えられるが、現在は燃焼実験室とは切断され、射垛（しゃだ）部分は除去されていることがわかっている。 ・ヒューム管と脚部の取次部分に樹木が植生している。これは平成 26 年に撮影した写真でも確認できる。また管の北側は、一部苔が生えている。 ・セメントと鉄線からなる管の外側は、一部破損しており、内部の鉄線が剥き出しになる部分がある。 ・叙上のように、概して保存状態は好ましくない。

履歴	・昭和 18 年「東京第二陸軍造兵廠本部及板橋製造所構内図」（加賀五四自治会（肥田一穂氏寄贈）文書）によれば、№270 に連結する形で弾道管と思われる構造物が表記されており、これが史料上の初出例である。 ・昭和 42 年に撮影された航空写真によれば、中央部分の切断は確認できない。また燃焼実験室と連続しているように見える。 ・昭和 46 年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、燃焼実験室との連結部分と中央部分が切断除去されている状態が示されている。
写真	 昭和 42 年撮影

旧東京第二陸軍造兵廠内弾道管



No. 49　加温貯蔵室

概要	・旧・火薬製造所エリアの東側に位置し、南側には土塁（北側）、東側には加温貯蔵室試験火薬仮置場基礎、西側は土塁跡が配される。 ・東西壁面には建設時のものと考えられる、編み入りガラスを収めた小さな横軸回転窓が設置されている。 ・南面は、東西の壁面と中央の出入口扉両脇の壁面から壁が付き出しており、その壁の小口には 4 ヶ所の大きな鉄製蝶番のようなものが現存する。 ・南北面にある扉、北面のシャッターが配されるが、これらは近年の更新と思われる。 ・鉄筋のかぶり部分コンクリートの爆裂や、コンクリート基礎の破損により、保存状態は好ましくない。
履歴	・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置に建物の存在が表記されている。この段階では東隣に加温貯蔵室試験火薬仮置場の存在は確認できず、これが史料上確認できるのは昭和 11 年以降である。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、「鉄筋コンクリート平屋建」として記録されるが、破損状態にあるとされ、使用不可と申請されている。
写真	

写真	

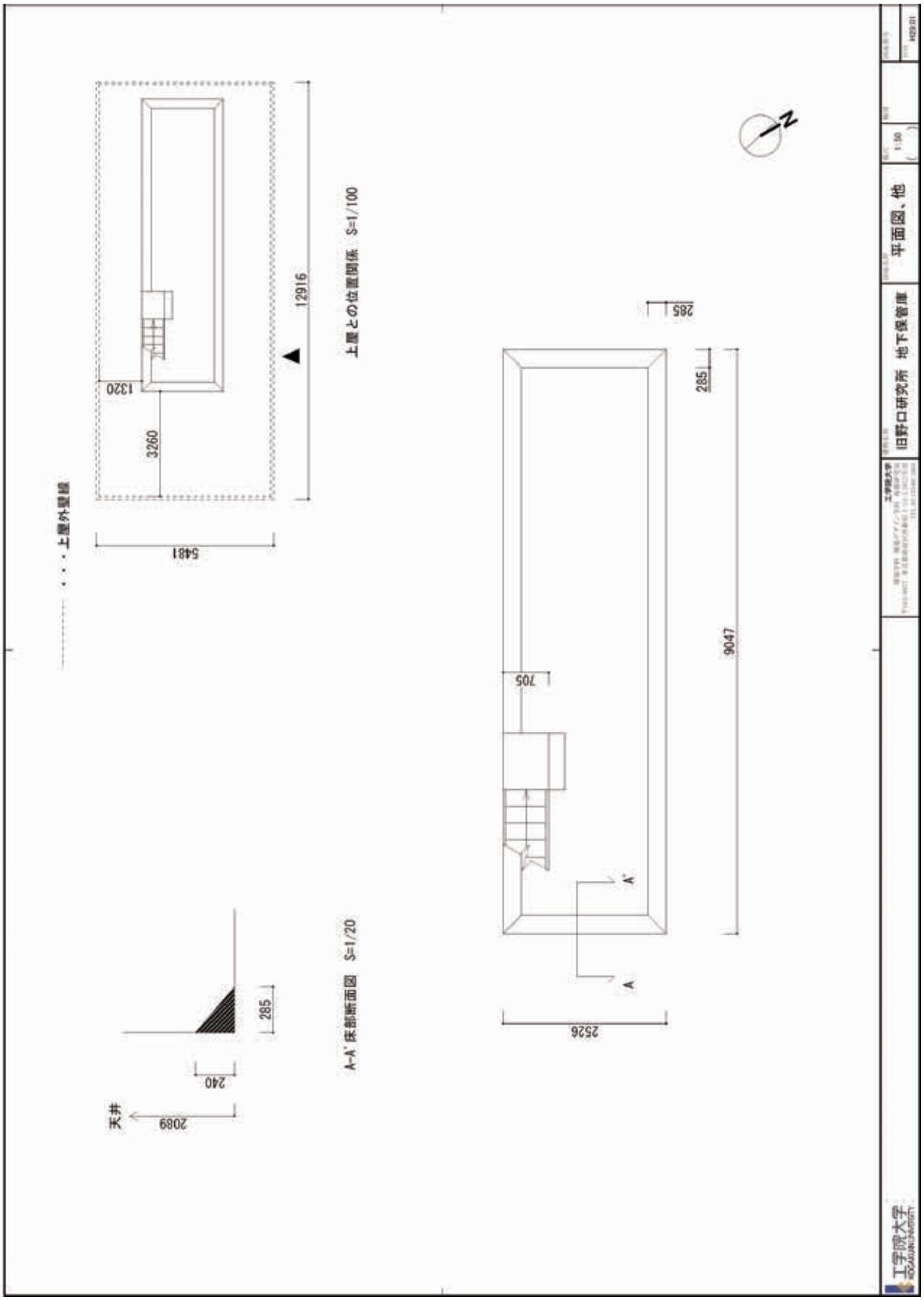
旧東京第二陸軍造兵廠内加温貯蔵室
平面図
断面図
北立面図（正面）
西立面図
東立面図

No.50　ガラス窓枠

概要	・史跡指定地外に立地していた爆薬製造実験室の東壁に設置されていたもので、東壁に 2 枚設置されていた。 ・鉄枠で細かく区切られているのが特徴で、全 30 枚のガラスが配される。 ・平成 29 年に建物が撤去された際に、全 2 枚のうち 1 枚が取り外され、現在は地下貯蔵室の扉上に保存されている。 ・窓ガラスには破損がみられ、保存状態は悪い。
履歴	・平成 29 年に爆薬製造実験室が撤去された際に、取り外され、一部保存された。
写真	

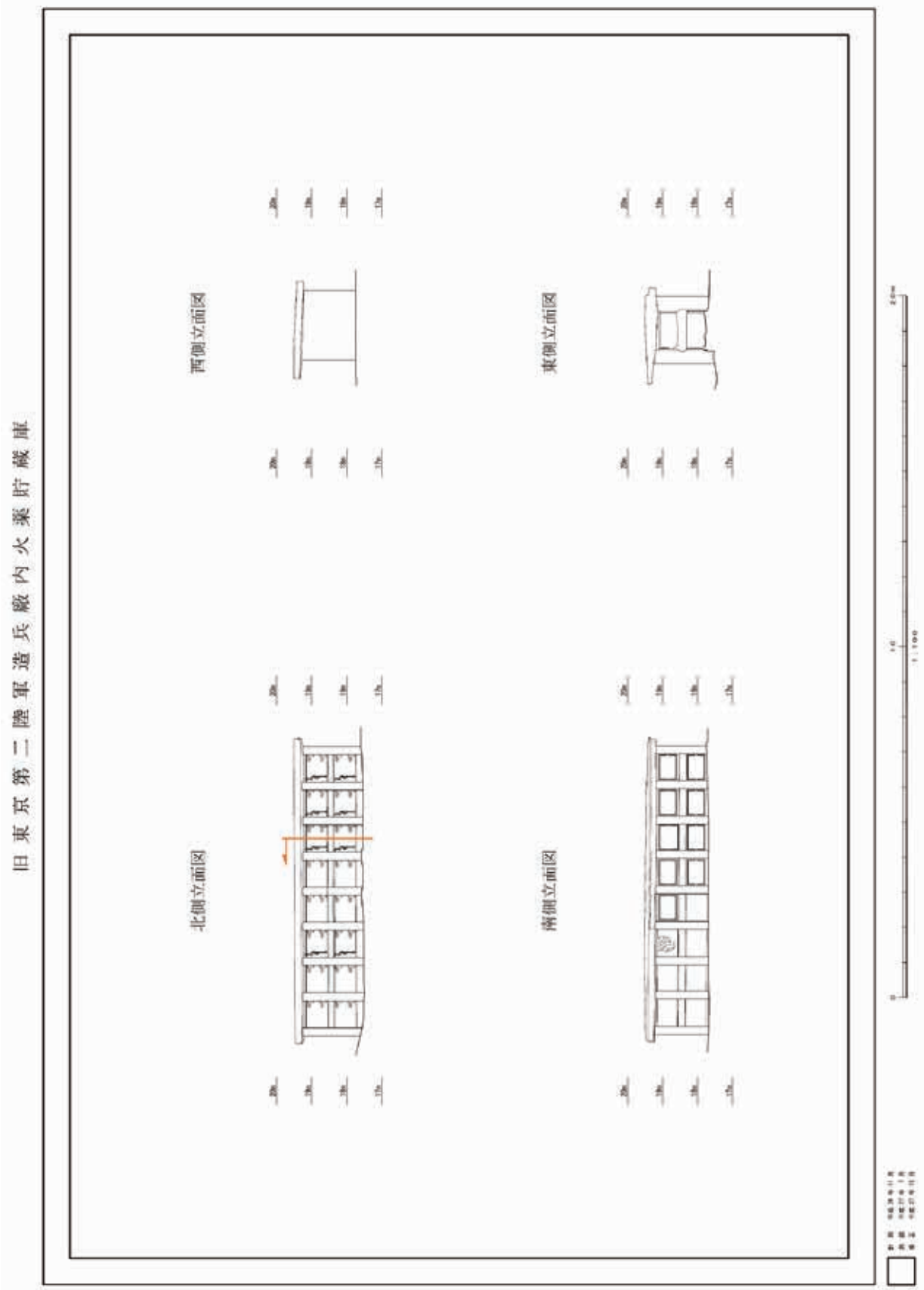
No.51　地下貯蔵庫

概要	・設置年代等、詳細は不明である。 ・従来上部にはプレハブが設置されていたが、平成 29 年に撤去され、現在は蓋がされている。 ・構造は、底部の端部が面取してあり、地下室ではなく、水槽として利用していたと考えられる。 ・表面には後に塗装されたと思われる防水の塗膜が剥がれている。このことから、元々水槽として利用されていたものを、野口研究所時代も同様に再利用していたと考えられる。
履歴	・設置年代等、詳細は不明である。
写真	


上屋外壁線
5481
3260
1320
12916
上屋との位置関係　S=1/100
天井
2089
240
285
A-A' 床部断面図　S=1/20
2526
705
A
A'
285
285
9047
N
工学院大学
旧野口研究所　地下煙管庫
平面図、他
1:50
H29.01

No.52　常温貯蔵室

概要	・旧・火薬製造所エリアの西側に位置し、南側には土塁（北側）、東側には土塁跡、西側は爆薬製造実験室が配される。 ・詳細な設置年代は不明だが、昭和 9 年の図面に存在が確認できるため、昭和 9 年以前に設置されたものと考えられる。 ・構造はコンクリート造で、上下 2 段 8 列の棚構造で、16 の鉄製扉を有する。扉は貫抜き錠で、現状では 8 面のみ現存する。各室はコンクリート製仕切りで区切られ、背面は木板に漆喰塗りである。 ・一室の背面には、「十条技術課　検」という検印が確認できる。 ・扉の開閉は固まっており、困難である。
履歴	・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置に「292」という番号の構造物が確認できる。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、昭和 18 年とほぼ同様の形状の土塁が表記されている。ただし、火薬研究所方向へ伸びる土塁と接続している。
写真	


旧東京第二陸軍造兵廠内火薬貯蔵庫
北側立面図
西側立面図
南側立面図
東側立面図

No.53　土塁（北側）

概要	・旧・火薬製造所エリアの中央より北側を東西に構築されており、東側は築山に接続している。 ・現在は長さ約 33m、斜面勾配 45°の形状を残す。 ・北側斜面にはコンクリート被覆がなされている。コンクリートの両端面が成型され、さらに西端部には先端が曲げ加工された鉄筋が露出していることから、鉄筋コンクリート部分は、現存する範囲だけだったものと考えられる。 ・詳しい設置時期は不明だが、大正 10 年の図面には現在の位置に土塁が構築されているため、少なくともそれ以前に設置されたものと考えられる。
履歴	・大正 10 年作成図に関東大震災の被害状況を書き込んだ「関東地方震災関係業務詳報附表及附図」（文庫－柚－375、防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置に土塁が構築されているが、現在よりも西側に長く伸び、現在の加賀橋からの延長線付近まで続いている。 ・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、土塁の改変がなされ、この時点で既に、加温貯蔵室と常温貯蔵室との間を隔てる土塁が、構築されていることがわかる。 ・昭和 12 年「大日記　昭和 12 年度事業費工事追加実施の件」（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、土塁が銃器庫付近で切断され、土塁北側の建物を囲む形で 2 本の土塁が構築されている。 ・昭和 18 年「東京第二陸軍造兵廠本部及板橋製造所構内図」（加賀五四自治会（肥田一穂氏寄贈）文書）によれば、加温貯蔵室試験火薬仮置場の東側や築山北側に、建物を囲む土塁が設置されている。 ・昭和 46 年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、土塁の撤去がなされ、現在と同様の形状になっている。 ・平成 29 年に土壌汚染対策として、盛土（50 ㎝）を施し、盛土部分の崩れを防ぐために種子の吹付を行った。
写真	

No.54　土塁（南側）

概要	・露天発射場と掩蔽式発射場（弾道管）との間を隔てる形で構築されている。 ・詳しい設置時期は不明だが、史料上は少なくとも昭和 9 年までには存在することがわかる。 ・土塁の東方向の延長線上にあたる、加賀公園内の箇所を試掘した結果、土塁が残存しており、版築工法で構築されていることが確認された。ただし北肩部分は撹乱され、上端部分は削平されていることがわかった。 ・土塁中央部分にコンクリート基礎が設置されているが、設置時期等の詳細は不明である。
履歴	・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置に土塁が構築されていることがわかり、これが史料上の初出である。 ・昭和 30 年代までは土塁（北側）と同様の高さを有していたが、その後削平され現在の高さとなる。 ・平成 29 年に行った土壌汚染対策工事により、盛土（50 ㎝）を行い、盛土の崩れを防ぐために芝を設置した。
写真	

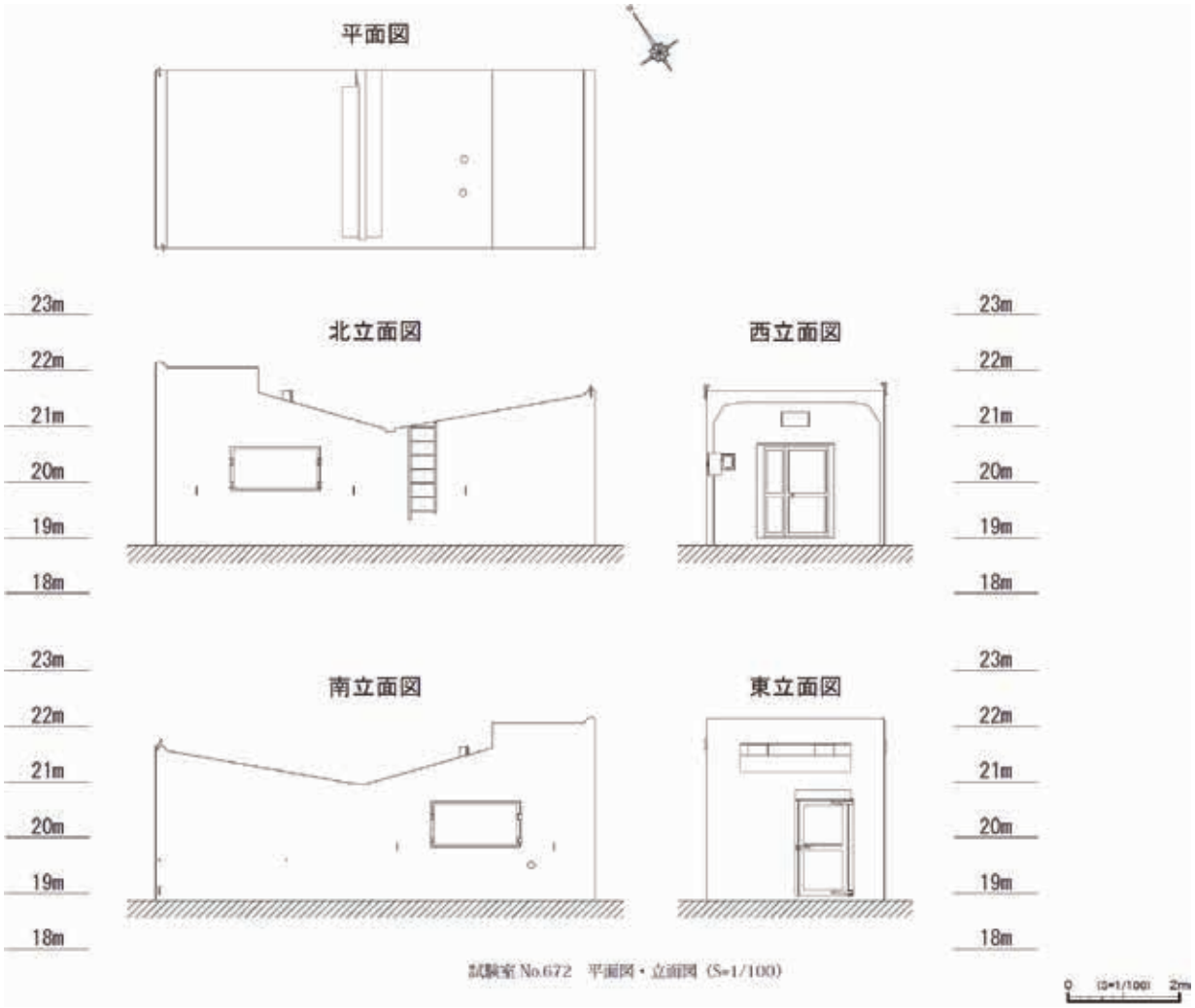
No.55　発射場基礎

概要	・旧・火薬製造所エリアのおよそ中央に位置し、北側には土塁（北側）とコンクリート擁壁、西側には銃器庫、東側は発射場、南側には燃焼実験室が配される。 ・上部には木造平屋建瓦葺の小屋があったが、平成 17 年に除去された。 ・基礎からは間仕切りにより 3 部屋構造だったものと考えられる。
履歴	・昭和 9 年「大日記乙輯　昭和 9 年〔昭和 9 年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第 10 号（昭和 9 年 4 月 1 日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、同位置に構造物が確認できるが、形状は四角形である可能性がある。 ・昭和 12 年「大日記　昭和 12 年度事業費工事追加実施の件」（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在と同様、北東隅に凸部分のある形状が確認できる。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によると、「Wooden bldg」（木造建築）と表記される。
写真	

No.56　試験室（No.672）

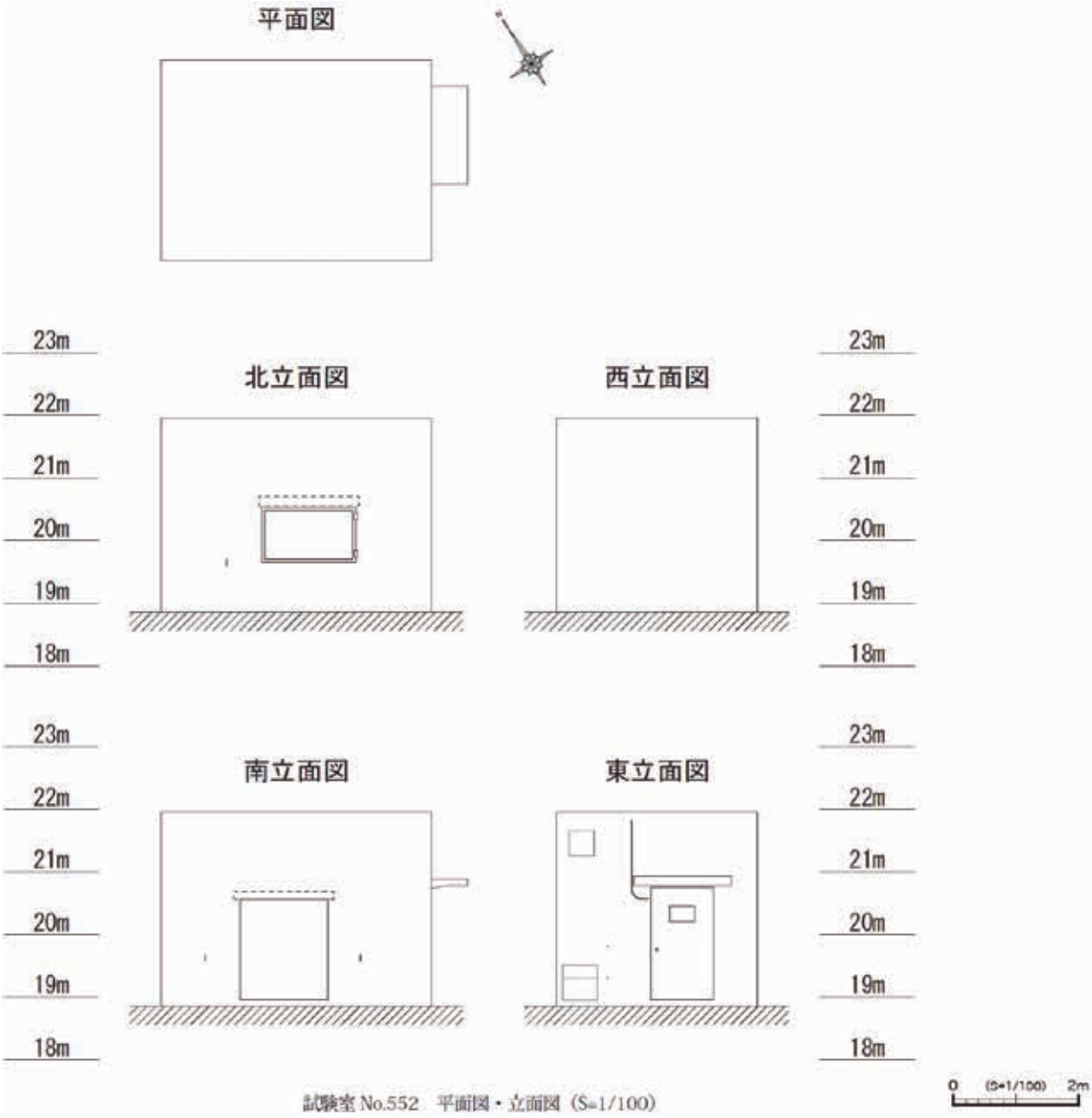
概要	・弾道管の南側、燃焼実験室の東側に位置し、試験室（No.552）の西隣に設置されている。 ・建物番号のNo.672は、戦後に振り付けられた可能性がある。なお昭和22年4月の史料によれば、「210」と付番されている。 ・内部は木板が張られ、スチール製棚や木製棚等が残置している。 ・外壁はトップコートもしくはモルタルが塗装されており、亀裂や割れがみられる。 ・外壁にはペンキと思われる塗料で「672」と表記されている。
履歴	・昭和9年「大日記乙輯　昭和9年〔昭和9年度事業費工事一部計画変更実施の件〕部外秘　第10号（昭和9年4月1日現在構内図）（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置に建物の存在が表記されているが、現在の鉄筋コンクリート建造物であるかは不明である。 ・昭和22年4月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、「鉄筋コンクリート平屋建」の「210」として表記され、野口研究所は「倉庫」として利用予定であると申請している。 ・昭和46年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、少なくともこの時点においては、試験室（No.552）と試験室（No.672）を覆うかたちで、「食堂」が設置されていることがわかる。 ・平成29年2月にプレハブを除去した結果、全容を確認した。
写真	 平成16年10月撮影

写真	


平面図
北立面図
西立面図
南立面図
東立面図
23m
22m
21m
20m
19m
18m
試験室 No.672　平面図・立面図 (S=1/100)
0 (S=1/100) 2m

No.57　試験室（No.552）

概要	・弾道管の南側、燃焼実験室の東側に位置し、試験室（No.672）の東隣に設置されている。 ・外壁にはペンキと思われる塗料で「552」と表記されている。 ・外壁はトップコートもしくはモルタルが塗装されており、亀裂や割れがみられる。
履歴	・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、「鉄筋コンクリート平屋建」「522」として表記され、野口研究所は「倉庫」として利用予定であると申請している。なおこの時点で「552」は「鉄筋コンクリート平屋建」として、燃焼実験室の南方向に表記されているため、別の建物だと考えられる。 ・昭和 46 年以降の状況を示していると考えられる「財団法人野口研究所配置図」によれば、少なくともこの時点においては、試験室（No.552）と試験室（No.672）を覆うかたちで、「食堂」が設置されていることがわかる。なお、昭和 22 年の「旧軍用施設転換申請書」で「552」と表記されていた「鉄筋コンクリート平屋建」の建物の表記はなく、この時点で既に除去されたものと考えられる。 ・試験室に接続し野口研究所時代に食堂として利用されていたプレハブ建物を、平成 29 年 2 月に除去した結果、全容を確認した。
写真	 昭和 46 年撮影



No. 58　軽便鉄道軌道敷

概要	・No. 7 と連続する。 ・コンクリートの線路敷が現存している。 ・線路は現存しない。 ・コンクリートの保存状態は、好ましくなく、欠損部や雑草が繁茂している箇所も確認できる。 ・旧野口研究所跡地から加賀公園方向へ、およそ東西の方向に伸びているが、加賀公園部分は盛土されており、コンクリートは確認できない。

履歴	・明治 39 年度（1906）、陸軍によって敷設された。当時の設計によれば、「第三十六号倉庫」（現加賀一丁目 3、学園通り付近か）から、石神井川を橋梁で渡り、正門・本部（加賀一丁目 10、現加賀西公園・東板橋体育館付近）を通り、「原料倉庫」（現加賀二丁目付近か）まで敷設された。 ・終戦時まで、電気軌道および軽便軌道は、延長されたものと考えられる。
写真	

No. 59　金網柵

概要	・石神井川緑道と旧・火薬製造所エリアとの間を南北に設置されている。 ・形状は金網柵の上部には有刺鉄線が付属している。脚部はコンクリートで固定されている。
履歴	・設置時期は不明だが、平成 2 年には既に設置されていたものと考えられる。 ・平成 29 年に実施した土壌汚染対策工事の際に一時撤去され、工事完了後に復旧された。
写真	 平成 2 年 8 月撮影 ・平成 2 年 8 月に旧野口研究所 501 棟（旧爆薬製造実験室）周辺を撮影した写真によれば、この時期から現在と同様の金網柵が設置されていたことが確認できる。

No.60　コンクリート塀

概要	・王子新道沿いに位置し、東西に伸びる。 ・現在の位置には、少なくとも昭和 9 年以降にはコンクリート塀が設置されていたが、現在設置されているコンクリート塀とは異なる。 ・詳しい設置年代は不明だが、昭和 46 年以降に更新されたものと考えられる。
履歴	・大正 10 年作成図に関東大震災の被害状況を書き込んだ「関東地方震災関係業務詳報附表及附図」（文庫－柚－375、防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置には「生垣」が設置されている。 ・昭和 9 年「大日記　昭和9年度事業費工事一部計画変更実施の件」（防衛省防衛研究所所蔵）によれば、現在の位置にはコンクリート塀が設置されている。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によると、現在の位置には「Concrete Wall」が設置されている。
写真	 昭和 46 年 8 月頃撮影 ・昭和 46 年 8 月に撮影された外壁の写真によれば、現在設置されているコンクリート塀よりも高さがあり、現在のものとは別種類と考えられる。

No. 61　土留

概要	・土塁の土留が、土塁（北側）の①西端部分と、②南側斜面西端部分に 2 ヶ所に設置されている。 ・①は近年設置されたものと思われ、②は平成 29 年の土壌汚染対策工事時に、盛土の土留として、擬木が設置された。 ・②は戦後に土留として設置されたと思われる煉瓦組を保護するために、これらを埋設する形で擬木を設置した。
履歴	・①は平成 27 年 7 月撮影写真では確認できないため、それ以降に設置されたものと考えられる。 ・②は平成 29 年に設置された。
写真	 平成 27 年撮影写真 平成 29 年撮影写真

No.62　石

概要	・旧・火薬製造所エリアの西側に位置し、燃焼実験室の南側に置かれている。
履歴	・詳細は不明。
写真	

No.63　排水溝跡

概要	・設置年代等、詳細は不明である。 ・現在使用されておらず、排水溝としての機能の可否を今後確認する必要がある。
履歴	・設置年代等、詳細は不明である。
写真	

No. 64　コンクリート基礎

概要	・土塁（南側）のおよそ中央部分に設置されている。 ・設置年代や機能等、詳細は不明である。
履歴	・設置年代や機能等、詳細は不明である。
写真	

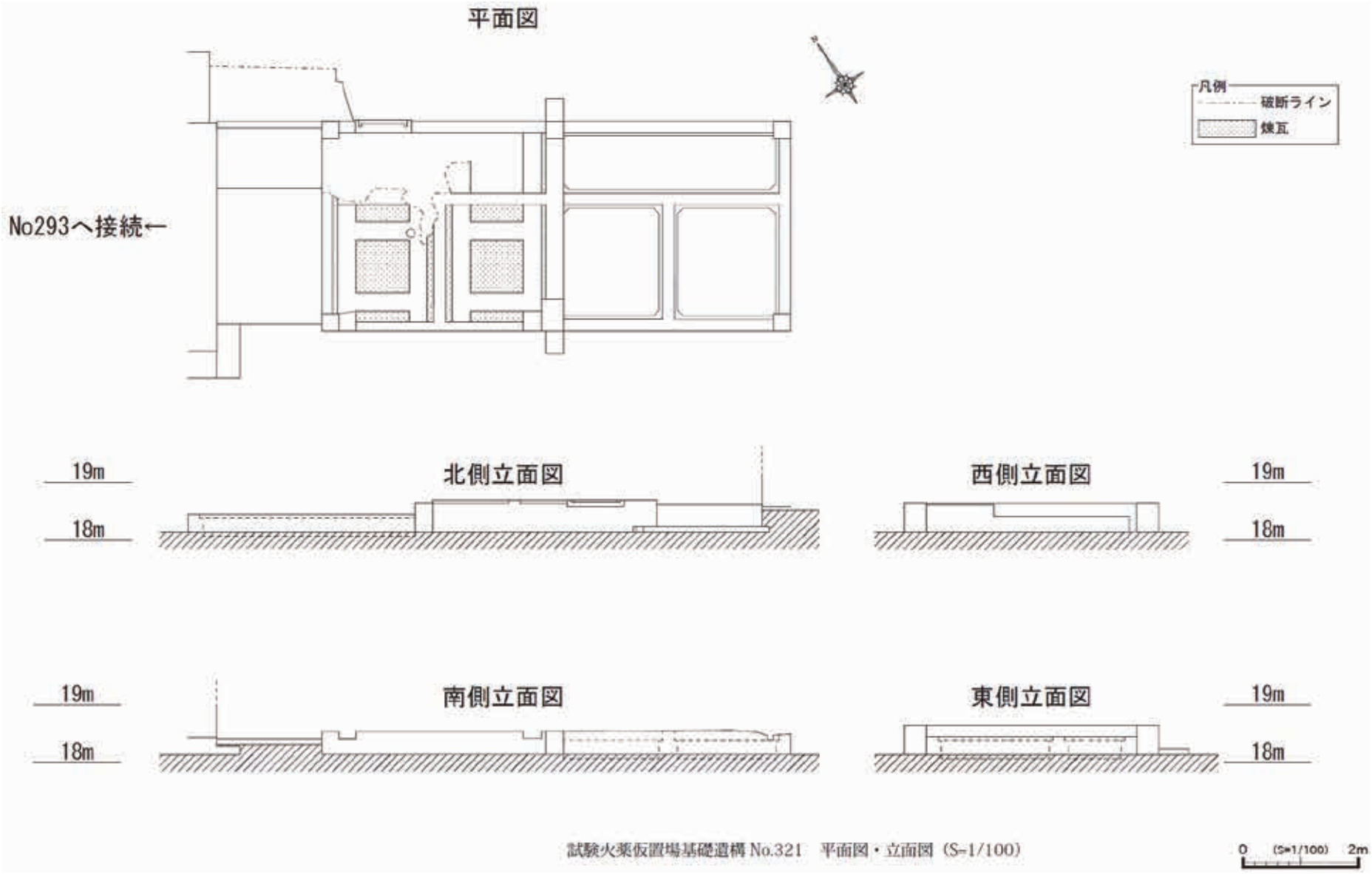
No. 65　階段

概要	・詳しい設置時期は不明だが、戦前の史料ではその存在が確認できないため、戦後野口研究所時代に設置された可能性がある。 ・野口研究所時代には少なくとも 5 ヶ所に設置されていた。現在その痕跡が残っているのは 2 基であり、①燃焼実験室西脇、②擁壁東脇である。現存していない 3 基は、発射場付近に設置されていた。
履歴	・戦前の図面では、存在は確認できない。 ・平成 29 年に①燃焼実験室西脇、②擁壁東脇にあった階段 2 基は、除却された。他 3 基の除却時期は不明である。
写真	 平成 28 年 2 月撮影

No.66　加温貯蔵室試験火薬仮置場基礎

概要	・旧・火薬製造所エリアの東側に位置し、南側には土塁（北側）、東側には土塁、西側は加温貯蔵室が配される。 ・加温貯蔵室に併設していた建物で、加温貯蔵室と廊下が連結する形で、基礎のみが現存する。 ・床面に耐火煉瓦を敷き、鉄板を覆った耐火構造が認められ、床下を這うように屋外に排水することができる鉄製配管が確認できる。 ・現在建物は現存しないが、鉄筋コンクリート造平屋の建物が 1 棟設置されていた。 ・設置年代、撤去年代ともに判然としないが、設置は昭和 11 年以前、撤去は平成 18 年から平成 26 年の間と考えられる。
履歴	・昭和 11 年 4 月の状態を示す図面が収録される「陸軍省 大日記 乙輯 S12-2-34」（防衛省防衛研究所所蔵）によると、現在の位置に「321」という付番がなされた建物が表記されており、これが史料上確認できる初出である。また西隣には加温貯蔵室（№293）も確認できる。 ・昭和 22 年 4 月に野口研究所から東京都渉外部に提出された「旧軍用施設転換申請書」（東京都公文書館所蔵）によれば、「鉄筋コンクリート平屋建」として記録されるが、破損状態にあるとされ、使用不可と申請されている。 ・撤去時期は不明だが、平成 18 年に撮影した写真には建物の姿が確認できるため、平成 18 年から旧野口研究所内の近代化遺産群の調査を開始する同 26 年の間に撤去されたものと考えられる。
写真	

写真	平成 18 年 10 月撮影



試験火薬仮置場基礎遺構 No.321　平面図・立面図（S=1/100）